熊本学園大学外国語学部東アジア学科

News Letter 第26号

２０２１年5月２１日発行

□■□学科の最新ニュース！□■□

4 月に新入生 55 名（定員 50 名）を迎えました。高校 3 年からコロナ禍に見舞われ苦労が多かったと思いますが、入学早々学生同士積極的にコミュニケーションをとる姿を見て、良い学年になると確信しました。新たに教員として、田上智宜先生と金美連先生を加え、さらに充実した教育を行ってまいります。

□巻頭言

スペイン風邪と温泉療法

熊本学園大学外国語学部准教授
東アジア学科長　土井　浩嗣

100 年前のパンデミックである「スペイン風邪」は、1918 年秋から 20 年春にかけて日本国内で猛威を振るった。歴史人口学の著名な研究者である速水融は、その死者を約 45 万人と推計している。当時植民地であった朝鮮でも、死者は約 18 万人に達した。何か当時の資料はないものかと探してみると、総督府医院長の芳賀栄次郎が記した「インフルエンザの予防法」(『朝鮮公論』1919 年 1 月）という短い記事を見つけた。芳賀は「最も有効な予防法として海水浴や温泉に行くこと」を勧め、日頃から「今少し強い抵抗力を養つて欲しい」と述べている。そして、最後におすすめの温泉として、忠清南道の温陽温泉、釜山の海雲台温泉と東莱温泉、黄海道の温井院温泉、咸鏡北道の朱乙温泉を挙げている。熊本の周りにはぜいたくなほど数多くの良質な温泉がある。新型コロナの感染状況が落ち着いたら、近場の温泉にゆっくり浸かって、抵抗力を養いたいものである。

□政治史研究とオーラルヒストリー

東アジア学科准教授　田上　智宜（新任）

政治史の研究においては、公文書や日記・書簡などの一次資料、それに新聞・雑誌記事、回顧録などの二次資料を用いることが多いが、関係者にインタビューをして当時の状況を語ってもらうオーラルヒストリーの手法もまた、現代政治史を研究する上では重要となってくる。政治家や官僚のような政策決定者や社会運動のリーダーの語りを通して、資料と資料の間をつなげていくのである。また近年では、名も無き庶民の語りを積み重ねることで、従来の資料ではすくい取れなかった歴史を明らかにしていく試みが、生活史や地域史、女性史などといった分野で盛んに行われている。

さて、オーラルヒストリーは往々にして時間との戦いでもある。私が参加した研究グループは、1980 年代の台湾政治における重要人物へインタビューを重ね、その成果を『台湾政党政治黎明期関係者インタビュー集（上)、（下)』として刊行したが、出版直前に 1 人、出版直後にまたもう 1 人が鬼籍に入られた。そのうちの 1 人は、1988 年から 2000 年まで台湾の総統を務めた李登輝という人物である。日本でもよく知られた存在であり、一部に熱烈な信奉者もいるが、李登輝時代の政治は功罪ともにあり、台湾では彼に対する評価も様々である。

李登輝は「自分の話したいことを一方的に話し続ける」タイプであり、我々のインタビューでも質問項目に逐一答えてもらうという訳にはいかなかった。しかし、だからといってこのインタビューが失敗だったかというと、そうではない。往時を回顧しながら奔放に展開される話題というのは、90 歳を過ぎてもはっきりと記憶している、その人の個人史において特に重要なエピソードなのである。彼が政治家として関わった事柄は挙げればキリがないが、予想外なところで「自分が成し遂げたという強い自負」が感じられることがあったりする。それはオーラルヒストリーの面白さを感じる瞬間でもある。

例えば、これまでの台湾政治研究において、台湾原住民族運動に李登輝が果たした役割が指摘されることはほとんどなかった。しかし意外なことに、インタビューでは、原住民族の問題に対して副総統時代から関心を寄せていたこと、それが（台湾の民主化にとって重要なステップである）1990 年代の憲法修正での「山地同胞」から「原住民」への名称変更へとつながったことを述べていた。このことは、原住民族政策の策定過程における李登輝の位置づけについて再考する余地があることを示唆している。このように、オーラルヒストリーから得たヒントを、今度は文献資料を用いた研究に還元させていかなければならないのである。

□「出張日記」に代えて―初めての中国

東アジア学科准教授　野田　耕司

初めて中国を訪れたのは大学時代の 1990 年 3 月、中国人の先生が企画した語学研修旅行であった。北京、天津、南京、蘇州、上海といった街を訪れる中で、風土、言葉、人々の暮らしなどから中国の多様性というものを実感した。北京では故宮（紫禁城）や万里の長城の壮大さに圧倒されたのは言うまでもないが、乾燥した北京の黄色い土埃と、生まれて初めて飲んだジャスミン茶の味が強烈な印象を残した。北京など中国北方でよく飲まれるジャスミン茶であるが、私には入浴剤のバスクリンを入れた風呂の湯を飲んでいる（と言っても実際に飲んだことはないが）ように感じられた。その後、語学研修で滞在した天津の大学の食堂でもジャスミン茶を飲むうちにバスクリンの感覚はどこかに行ってしまった。ただ、北方の乾燥した空気にはなかなか慣れなかった。無事語学研修を終え、南京に向けて走る列車の窓に映る風景が黄色から次第に緑色に変わっていくのが興味深かった。列車から降り立った江南の地、南京、蘇州、上海では潤いが感じられた（この湿度が夏場のこの地には蒸し暑さとしてマイナスに作用するのだが)。面白いことにこの地でよく飲まれているお茶もまた緑色をした緑茶であった。

□東アジアのあれこれ

東アジア学科講師　黒島　規史

2020 年末に韓国の人気ラップサバイバル番組 “SHOW ME THE MONEY” の 9 番目のシーズンが放映された。この番組から登場した曲は韓国の音楽チャート Melon においても素晴らしい成果を残した。特に “VVS” という曲は長い間 1 位に君臨していた大人気男性アイドルグループ、BTS の “Dynamite” をおさえ 1 位を獲得するという快挙を成し遂げた。さらに番組中の “VVS” の動画は YouTube で 1000 万ビューを超えた。

韓国における HIP-HOP 文化は、日本と比べるとずいぶん大衆の人気を得ているようである。世界的な K-POP の流行とともに、海外にもファンは多く、動画サイトのコメントには韓国語以外の様々な言語を目にすることができる。

このような韓国の HIP-HOP 文化に触れたことのないと思っている人でも、韓国のアイドルグループには必ずといっていいほどラップ担当がいるため、ラップを聴いたことがある人も多いはずである。韓国のグループが日本で曲を発表するときもラップは必須である。

この原稿を書いている 2021 年 4 月現在、“SHOW ME THE MONEY” の高校生版といえる “高校ラッパー4” が放映中である。一人の K-HIP-HOP のファンとして、この番組からどのようなヒット曲が生まれるか、今から楽しみである。

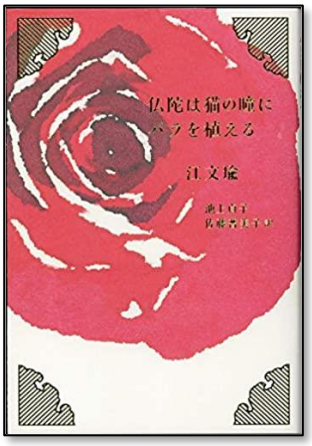
□新書紹介

江文瑜著、池上貞子・佐藤普美子訳『仏陀は猫の瞳にバラを植える』（思潮社、2021 年）

現代台湾を代表する女性詩人江文瑜（1961-）の邦訳詩集。台湾女性詩人たちの創作は、文学という海域で女性が自由に「戯れること」が意識されてきた。猫の一生を描く組詩によって語られる本詩集の詩体には、海原を向こう岸まで泳ぎ切ることが目的ではなく、泳ぐこと自体を楽しもうとする台湾女性詩人の奔放さがある。

この詩集の台湾での読まれ方を、訳者の池上は「「仏陀」と「猫」と「薔薇」のテーマを関連づけ、猫の異なる生命の段階を通して、人性におけるさまざまな生活経験や課題、心と宗教との対話について、演繹と比喩を行っている」とまとめている。

ページを捲っていくと、現実と夢と宇宙を渡り歩き、また人間の世界へ立ち戻って詩の言葉遊びを楽しむ詩人の姿が思い浮かぶ。江は冥王星からピアノの鍵盤の上を歩く猫の足取りにまで縦横無尽に筆を走らせ、読み手を安定した一つの世界に留めようとはしない。一冊の詩集を「愛の物語」として位置づけることほど、楽なことはない。それには社会が定義した愛の形を語る安心感がともなうからだ。逆にこの詩集からは愛の有象無象、星の数ほどの愛のカタチと、愛に抜き取られた愛の形が感じられる。　（東アジア学科准教授　小笠原　淳）



■編集後記■

去る 3 月 24 日に、分散開催の形で学位記授与式がありました。2 年ぶりの式典ですが、節目としての式の大切さを実感しました。卒業生の謝辞が、気持ちのこもった等身大の素直な言葉で、思わずうるっときてしまいました。（ど）

発行者　熊本学園大学外国語学部東アジア学科
編集人　土井　浩嗣（東アジア学科長）
〒860 - 8680　熊本市中央区大江 2－5－1
Tel 096-364-5161（代表）